

Sandplay with Dora M. Kalff

ードラ・カルフとの箱庭療法ー

ISAP 国際分析心理研究所所属 大塚 紳一郎

報告者 神戸学院大学心理学部講師 定政 由里子

2019 年 7 月 31 日 15 時 30 分より、神戸学院大学有瀬キャンパス 14 号館において、心理学部学術講演会が開催された。今回の講師は、ISAP 国際分析心理研究所でユング派の分析家になるためのトレーニングを受けておられる大塚紳一郎先生。ユング派の分析家であり、映画監督でもあるペーター・アマン氏が撮影した、ドラ・カルフと箱庭療法のドキュメンタリー映画を、解説を交えて上映した後に、箱庭療法に関する短い講義と、分析心理学の今日的意味に関してお話くださった。

箱庭療法とは、全景を一望できる大きさの砂の入った箱の中に、人、動物、植物、建物、乗り物などのミニチュアを置き、自分の中にあるものを表現することを通して行う心理療法である。箱庭療法の創始者であるドラ・カルフ女史によると、彼女のもとに連れてこられる子どもは、安全が脅かされているという。それは、日常生活や学校生活の中で情緒的に不安定である、友達との間でトラブルを起こすなど、何らかの「問題」という形で周囲には認識される。

映画の中では、そのような子どもたちがカルフ女史と共に箱庭をつくる。何をつくるかは問題ではなく、箱庭療法では経過が大切にされる。箱庭の中で、何が変化しているのか、そして何が続いているのか。経過を見ていくと、それぞれの子どもたちの中にあるテーマが浮かび上がる。一人の 6 歳の男の子が作る一連の箱庭を通して、その過程が詳らかにされて

いくのが、今回の映画である。箱庭を作る際、子どもたちは完全に自由である。箱庭の砂に水を混ぜて山を作っても良い。時にマッチに火を灯すことさえ許されるという。全くの自由を保護された空間で生きる。自由であることを許されるというのは、存在の肯定に繋がるのであろう。存在を肯定された子どもたちは本来あるべき生き生きとした自分を体験し、そうすることで「問題」とされていたことが解消するというのが箱庭療法の醍醐味であると言えるのかもしれない。

日本の箱庭療法と欧米での箱庭療法には大きな違いがあると、講師の大塚氏から指摘があった。日本においては、箱庭を作る際、セラピストはクライエントの傍らに立ち、静かに見守ることが多いが、欧米では箱庭を通して言語的なやり取りが行われるという。沈黙に意味を見いだす日本人と言語化を良しとする欧米人の違いであると言えるかもしれないが、互いの苦手とする部分を学ぶ姿勢も必要ではないかとのことであった。

臨床心理学においてもエビデンスが求められる現在、魂までも射程に入れるユング派の心理療法はやや分が悪い。だが、「信じることの難しさ」に直面する時、ユング派の心理療法には、果たせる役割があるとの大塚氏の言葉は、心に留めておきたい。